

先週の礼拝メッセージ(2022年1月9日) ベン牧師

「栄光は神に」 エフェソの信徒への手紙 3:20-21

今日の箇所で、「・・・すべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方」とは、父なる神のことです。「父なる神」と一言で済ませられるのに、このように説明が加えられているのには意味があります。もう一度20節に目を止めてみましょう。

「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に」

私たちは自分の祈りや願いはきかれて欲しいです。しかし、時によっては、私たちの思い通りではなく、それをはるかに超えてかなえてくださるお方が神様だということです。

私たちには、自分の願いや計画が最善に思えても、私たちの人生全てを知っておられる主には、主の最善があり、主に信頼する者をその道へと導いてくださるのです。自分の思い通りの道が開かれなかった時、私たちは祈りがきかれなかったと落ち込んだりします。しかし私たちには最善なんて見えていないのです。なぜなら、私たちの知識や経験は限られており、その中でしか考えられないからです。

さらに、夫婦間や職場、そして教会でもその限界があるといえるでしょう。それぞれが自分の最善のみを主張していたら、どこかで亀裂が起こり立ち行かなくなってしまいます。

教会でも、牧師一人が何もかも動かしているとしたら、それは健全な姿ではありません。なぜなら、牧師の最善にも限界があるからです。教会は主の体です。かしらはキリストです。その神様に委ねて、教会全体で祈りの中で建てあげるのが本来の教会の姿です。

私たちにはそれぞれに計画や夢があります。しかし「人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する。」(箴言 19:21)と聖書は語っています。

私の最善だけで進むなら、それは単なる自己中心です。あるいは教会として、一人の人の最善で進むなら、つまづく人が出てくるでしょう。なぜなら、私たちの最善は必ずしも本当の最善でないからです。

しかし神様は、私たちの思いをはるかに超えて、私たちの人生を導いてくださるお方です。そういう神様に栄光があるようにという頌栄で、パウロは祈りを閉じるのです。

エフェソ3:15からのパウロの祈りは、神様がどんなに私たちを愛してくださっているかを知ることができるように、その愛に私たちが満たされるように、そして私たちは自己中心から脱却し、私たちの思いを超えて働かれる神のみこころを悟ることができるようにと続きます。そうなった時、私たちの人生、家庭、教会は神の祝福の満ちあふれる場となるのです。

パウロの頌栄は、「教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。」と締めくくられます。

教会というのは、神の栄光が表される場所です。それは、会堂の大きさや設備の充実、イベントの多さや財政の豊かさを指しているではありません。イエス様は「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」(ヨハネ 13:35)とおっしゃいました。教会がキリストの愛に満ちあふれる時、それが周りの人々への証となっていくのです。ここにこそ神の栄光が表れるのです。

当時のエフェソ教会のメンバーの多くは奴隷の立場であり、エフェソの町はアルテミス神殿の門前町で栄えていました。そういう中で、クリスチャンとして生きていくのは大変だったでしょう。パウロは彼らの実情を知っていたからこそ、私たちの思うところを超えて神様は働くことができるのだと強調したのです。これは、今の私たちへのメッセージではないでしょうか。何がなくても、たとえ自分の思い通りにならないことがあっても、そこに目を止めるのではなく、それらをはるかに超えてかなえることができる神様に目を止めることからスタートしましょう。

ご家庭であなたがたった一人のクリスチャンであっても、クリスチャンは祝福の基として、そこに置かれているのです。あなたの存在が家庭を祝福で満たしているのです。ですから大丈夫。私の存在がこの家庭を祝福し、必ず家族は救われると信じましょう。神様は私たちの思いを超えて働いておられるのですから。

主は生きておられ、私を支えてくださり、栄光を表してくださる、その信仰をもって私たちは、主の働き的一端を担わせていただきますよう。

